

明日から頑張る！寝よう。
今日は色々あったな、目を閉じるとすぐに眠れそうだ。
おやすみ...

その10

_____あれから3年経った。

明日から頑張る！そう思い続けて結局、最後まで頑張らなかった...
学園を卒業した俺はうだつの上がない傭兵をしている。
当然、大きな依頼は回ってこない。今日もショボい仕事だ。

ズザァァン

機体に凄まじい衝撃が走る。
な、何だ？何が起こった？敵？やられたのか？

たった一撃で機体の異常を知らせる警告音が鳴りっぱなしだ。
ブレードで斬られたのか？

改めて自分の置かれている状況を確認して、愕然とした。
損傷はコックピットまで達している。
そして破損した計器類の破片が、俺の体に無数に刺さっていた。
パイロットスーツで防げるレベルじゃない。

操縦席は血まみれだ。血は尚もだらだらと流れ続けている。
これだけ出血しているのに不思議と痛みは無い。

そういえば傷が深すぎると、逆に痛みを感じなくなると聞いたことが...
俺はかなりの重症みたいだ。

ザザ...ザザザザ...

「槍杉 くん、応答して ださい。」
通信がオペレーターから入る。

「敵 そちら 正面 で。体 AP 端 減 てま。」
あれ？よく聞こえなくなってきたぞ。何を言っているんだ？
これは.....通信機能が落ちているんじゃない。
俺の耳が聞こえなくなっているんだ。

やられた。
こんなに近づかれるまで気付かないなんて...
オペレーターは何をやっていたんだ。

いや、人のせいにするのは止そう。
戦場で物思いに耽っていた俺も同罪だ。
周囲を全く警戒していなかったのだから。

体が軽くなり始めた。今までに感じた事のない、初めての感覚だ。
もうどうでもいいか...

頭が朦朧としてきた...

「セレン姉さん...ベアトリス...ごめ...ん...」

- E N D -

隊長とトロットの説教部屋

隊長「早速死んだか...。ここは貴様のような出来損ないが来る場所だ。」

トロット「来る場所だ！」

隊長「貴様もドミナントを目指すなら、常に努力を怠ってはならん。」

トロット「隊長、ドミナントは先天的な者で、努力ではどうしようもないのでは...？」

隊長「何か言ったか？トロット。」

トロット「い、いえ、何でもありません、隊長。」

隊長「貴様の頭のデキはそんなによくない。覚えておけ。」

トロット「覚えておけ！」

トロット「隊長、追撃しますか？」

隊長「慌てるな...、後は彼らに任せよう。」

アンシール「雑魚が、死に腐れ、もう死んでたかw」

ピン・ファイヤー「若造が...、今度は予習しろよ。」

キノコ先生「お前じゃこの先生きのこれないぜ。」

ボス・サヴェージ「イレギュラーなんだよ、やる気なさすぎなんだよ、お前はな！」

モリ・カドル「洋平！ちゃんと予習しろよお！」

隊長「さあ、戻ってやり直せ。」